

山
か
い
き
る

無印良品

山といきると、山がいきる

遠くの山を見ていたら、森の色の違いが気になりました。

森によって生えている木が違うのだろうか？

その木はだれが植えて育てたものだろうか？

山を登っていくと、大きなクレーンのようなものが見えました。

木を切り出して運ぶところでした。

運ばれた木はどうやって木材になるのだろうか？

木材にならなかった木はどうするのだろうか？

山を歩いていたら、山で暮らす人に会いました。

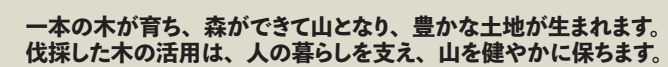
山でつくれるものってなんだろう？

山のおいしいものってなんだろう？

山がずっと山であるためにできることってなんだろう？

山でいきることをなりわいとしながら、同時に山がいきるよう、
山を育て、山を守り、山を食べ、山でつくる人たちを訪ねました。





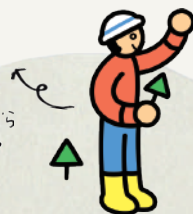
山 か い き る

目次

6
ページ

山となりわい1
工藤 建樹
(樹)

成長した姿を思い浮かべながら
一本の苗を植えています。



32
ページ

山と生活
平松 佑介
(小杉湯3代目当主)



いい木のあけけ"さまて"
いいお湯が"あ"いてます。

44
ページ

山となりわい8
尾野 文俊
(鬼塚電気工事株式会社)



12
ページ

山となりわい2
中田 昂希
(ヤマサンTree Farm)

木を切ることで、
山を管理すること。



14
ページ

山と食
山の恵みと
マンマの想い
渡川マンマ



28
ページ

山となりわい6
酒井 晃二
(トキワランパテック株式会社)



加工がしやすく長持ちするから
生活にかかわる多くのものを
作ることができます。

36
ページ

山となりわい7
林 紗由美
(株式会社グロースリング 百年木材事業部)



38
ページ

山となりわい4
川添 恵作
(デクスウッド宮崎事業協同組合)

山と食
お酒に染み出す山の味
有明産業株式会社
尾鈴山蒸留所

山となりわい5
井口 皓介
(株式会社鳥取CLT)

20
ページ

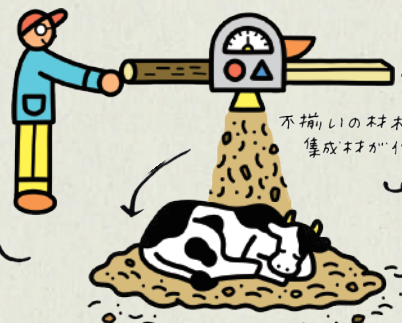
不揃いの材木や間伐材から
集成材が作られます。

26
ページ

16
ページ

山となりわい3
浦元 孝大
(株式会社コーポレーション・クリエイト)

捨てられる木や木の部分が、
火燃し炭や肥料になります。



山と食
職人が作る、
食を支える炭
竹見野の樹
株式会社グリーンノーム

34
ページ

48
ページ

編集後記

みんな同じ生活者



山の恩恵を受けてる分、ちょっとだけ他よりも 真剣に考えられるんじゃないかな

いつき
樹
くどう たてき
工藤 建樹



「林業って素材生産の分野と、新たに木を育てていく造林の分野でちょっとだけ分けてあるんです。自分たちは造林を専門にしています」宮崎県日之影町。ここで造林を専門に行うのは、樹の工藤建樹さんです。「造林業はただ木を植えるだけではないんです。木を植える場所を綺麗にする地ごしらえや、獣害防止のネットをつけたり、苗の周りの草を刈る下刈り、木を大きくするために間引く間伐などまでやります」工藤さんは建設業を目指して学校を卒業した後、東京のゼネコンに就職。ビルなどの建設現場の監督や管理をしていたそうです。「ずっと建設業に携わっていきんだらうなって思った時、うちの親父が死んだんですよ。自分は長男なので、戻ってこないといけなと。それで戻ってきて、こっちで何しようかなと考えてた時に、後輩から声か

けられて。林業の人手が足らんから手伝ってくれんやろうかと」林業の経験がない工藤さんは、最初はあまり深く考えずに森林組合の作業員になったそうです。しかし都会からUターンし、長らく触れていなかった山の水や土に関わっていくうちに、ここの暮らしの全てが山と繋がっていると感じるように。「木材産業に関わる人にはいろんな仕事があるんですよ。林業関係はもちろん、運搬会社やハウス・家具メーカー、保険屋さんまで。色々な情報共有ができるし、こういった人たちの集まりに加わることで、ネットワークがかなり広がりましたね。もちろん競合関係もあるんだけど、この業界自体を底上げせねばという意識を持っているから、横の繋がりが強いんですよ」このような人たちと話すうちに、山に対する危機感を持つようになった

と言います。「全国的に造林っていう分野は疲弊していくと、なかなかやり手がいないと気づいたんです。そのことがずっとモヤモヤしてて。どんどん山から木は出るけど誰が育てるのと。そして、家のこととか色んなことが落ち着いた時に、造林で独立してやっていこうと思ったんです。自分は山を育てるぞと」その後、工藤さんは造林業者として独立します。仕事と暮らしの両方で山や自然と付き合っていく中で、その土地で築かれた文化や歴史への感じ方も次第に変わっていったと言います。「今、神楽の保存会に入って実際に神楽も舞っているんですけど、子供の頃は興味もなかったから、全然知らなかったんです。戻ってきて、集落の祭りとかに遊びに行ったんですよ。そこで神楽の伝承があって。なんだこれとは。めっちゃめっちゃいい

樹

宮崎県日之影町の造林業者。杉のコンテナ苗栽培から、苗植え後の間伐まで行います。その間に必要な山の地ごしらえや下刈り、獣害対策ネットの設置も施し、山を育てるための多くの活動に携わっています。



じゃないかと。それで門を叩いたわけなんですけど、一度地元を離れてなかったら、その良さにも気づけなかったかもしれません」現在、工藤さんは杉のコンテナ苗の栽培に取り組んでいます。コンテナ苗とは専用のコンテナで育てる苗で、工藤さんは波型の専用シートで根元を巻くコンテナを使用しています。半年から1年かけて成長させ、その後山に植え付けます。一緒に巻きつける土づくりも試行錯誤しながら行っているそうです。「従来のやり方、土に刺して育てる路地苗よりも、コンテナ苗の方が山での活着率が良いんです。しかし、その前の山の地ごしらえが大変で。新しく木を植えるため、下刈りしやすくするために、最初に綺麗にする

わけです。木を伐採した後の枝葉とか、雑木の残りとかを等高線状に片付けていくんですけど、これが大変なんですよ」山を育てるため造林業に進んだ工藤さん。山の大切さや自然を守るという意識はほんの些細なことで変わると言います。「こんな田舎に住んでたらすぐそばに自然があって、ちょっとだけ、その恩恵を肌身に感じやすい。水や土や植物をちょっとだけ都会の人たちよりは身近に感じているからこそ、歴史的背景も少しか重く感じるんだと思います」山から下はみんな一緒。山の視点に立ってみる人が増えていくと、ちょっとだけ優しい世の中になるのではと工藤さんは考えます。

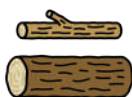






地ごしらえされた山

区画にある樹木を全て伐採した後、次に苗を植えられるように、残った枝や葉を“人の手”によって等高線に沿って片付けられます。



先人が遺してくれた木を、 次の世代のために回収する

ヤマサンTree Farm

なかだ こうき
中田 昂希



車一台がやっと通るくらいの山道を上って到着した“現場”。機械が向かい合い、倒した木を引っ張っています。手元の繊細な操作に合わせて大きくしなやかに、かと思えば突如先端からセンサーが現れ、あっという間に木を切断。想像していた林業用機械とは大きく異なります。「ハーベスタといって、木を倒すところから枝葉をはらって、ある程度の長さに切るところまでできる機械です。あっちがフォワーダっていう機械なんですけど、木を下まで下ろしてきます。向こうにあるのがプロセッサです」

熱心に話してくれるのは、宮崎県美郷町にあるヤマサンTree Farmの中田昂希さん。ヤマサンTree Farmの仕事は木を切ること、そし

て山を管理することです。中田さんは山の調査や進行管理などをメインに行っています。「木を伐採するとハゲ山になって、緑が減るように感じますよね。でも今ある木が全部50年とか経っちゃうと、手に負えなくなるんです。宮崎は特に木の成長が良すぎて。なので“皆伐”^{かいばつ}して山を作り直していく動きが多いですね」

皆伐とは、一定区画の木を全て伐採することです。この他に、木を大きく成長させるためにあえて木を間引いて適度な空間を作る間伐^{かんぱつ}という方法もあります。戦後植えられた木は、先人が後世のために投資したものの。それをきちんと回収するのも自分たちの役目だと中田さんは言います。ヤマサンTree Farmでは、自分た

ちが皆伐した場所に木の苗を植えます。近隣の森林組合に依頼し、植林をしてもらいます。その数、年間2万本以上。まさに山を作り直す作業です。

「これは高性能林業機械を使ったシステムで、あそこで機械に乗ってるのが親父です。ここの作業班長なんですけど、あの人は全体を見れる位置に必ずいます。ずっと、全部、見てます」お父さん、お兄さんも林業従事者の中田さん。お父さんの働く姿に影響を受け、自分も山で仕事をするのが小学生の頃からの夢だったそうです。幼い頃から機械や動く仕組みに興味があり、プラモデルを組んだりおもちゃを解体したりしていたそう。現在の趣味はカメラで、写真撮影から動画編集まで行います。林業の現場で

使用する機械についても調べがいがあると言います。「説明書とか、複雑なやつほど分厚くて、あれをめちゃくちゃ読み込みます。説明書を読むのが好きなんです。なので機械に何かあった時は大体自分に連絡が来ますね」

林業大学校を卒業後、ヤマサンTree Farmに就職した中田さん。仕事が終わってからも勉強や情報収集を怠らないようにしているそうです。お父さんとの会話はいつも仕事のことばかり。早く追いついて、同じレベルで話ができるようになるためだそう。「現場での指示は親父がやってるんですけど、最初は同じ目線で話ができなかったんです。実力もありますが、可視化できたらそこのギャップは減っていくかなって思っ。今はデータ化が進んでるんで、どう現場に反映さ

せていくかを考えています」

データ化や自動化に向けて燃えていると言う中田さん。ドローンを導入して山を解析したり、実際に山を歩いて調査をするなど、情報を整えているそう。現在、情報通信や高性能機械などの先端技術を用いた林業のスマート化が推進されています。それを現場レベルでどのように活かしていくか。また、それを扱う人材の育成も課題となっています。

「機械も更に進化してて、木の価値が最大になるよう切る長さを提案してくれるものもあるんですよ。凄いです。これから東京出張で、機械の展示会に行くんです。最新の機械と技術が集まるんですけどね。事前に全部チェックしてリストアップしてます！」嬉々として話す中田さんの笑顔がとても頼もしく感じました。

ヤマサンTree Farm

宮崎県美郷町にある林業会社です。木の伐採だけでなく、近隣の森林組合と連携した植林や山の生物多様性の保全など、持続可能な林業に取り組んでいます。人材の育成にも力をいれており、従業員の平均年齢は全国平均を大きく下回ります。その1人である中田さんは、スマート林業推進本部長・森林施業プランナーとして次世代の林業を担っています。



どがわ
渡川マンマ



きてきた人たちのルールだと言います。収穫した食材は、1年中保存できるよう干したり塩漬けにします。これも昔から当たり前にやってきたことだそう。そういった食材を使って作る昔ながらのお弁当を、一人暮らしの高齢者の元へ届けます。渡川マンマの活動の目的の一つが、高齢者の見守り。お弁当を届けつつ、1人ひとりと会話を交わします。

「山で生活をしてきた方たちに、当時と同じものを食べてもらって元気も一緒に届けたいんです」と言います。山の恵みを大切にいただきながら人々を元気にするマンマ達。これからもエネルギーに活動が続けていきます。





循環の中で生まれたコーンで、 ありがとうと言われるようになりました

株式会社コーポレーション・クリエイト

うらもと たかひろ
浦元 孝大



「このとうもろこし、朝収穫したやつなんですよ。食べてみてください」笑顔でとうもろこしを手渡してくれたのは、宮崎県にある(株)コーポレーション・クリエイトの代表・浦元孝大さんです。実家は代々製材所を営んでおり、先代が関連事業としてこの会社を設立されたそう。「うちは木や竹に特化した産業廃棄物処理会社です。産業廃棄物って聞くと、鉄とかプラスチックを思い浮かべますよね。木が産業廃棄物になるというのは、一般の方にはあまり認知されてないかもしれません」浦元さんは体育教師を目指し福岡の大学に進学後、スポーツトレーナーに興味がわき、整体の専門学校に転学。整体院での勤務を経て現在に至りま

す。家業に戻るきっかけは従業員の体調不良による人手不足だったそう。「ほんと、軽ーい気持ちで戻ってきたんですよ。ちょっと手伝ってあげようくらい。そしたらいつの間にか今ですよ。まあ、性に合ってるんですかね」現在はコーポレーション・クリエイトの2代目と製材所の4代目代表を兼任しています。山を整備した際に出る枝葉や切り株、ダムなどに蓄積する流木、製材の際に出る屑など、廃棄物となる木は意外に多いのだそう。加えて近年では放置された竹林の問題も深刻になっています。このような木や竹を処理することが浦元さんの仕事です。「林道を作る時に残る切り株。これを土で覆っても、数年後には根が腐れ

て陥没してしまうんですね。危険なのでしっかり撤去します」集めた木や竹はチップ状に加工され、再利用可能に。現在はバイオマス燃料用への加工が多いそうです。広大な工場には、バイオマス燃料用を含め、様々な大きさに砕かれたチップが積まれています。倉庫の一角にはまるでかつお節のようなチップの山。「この辺りは畜産が盛んで、このチップが家畜のベッドになってるんですよ。チップが粗いと、牛や豚が寝た時に痛いんですよね。なので、畜産用はさらに手間をかけて加工します。細かすぎると家畜が吸い込んでしまうので、ちょうど良い大きさと柔らかさにして。ふかふかでしょ？」畜産用チップの役目は、ここで終わ

りではありません。このチップに家畜が排泄すると、それが今度は堆肥になります。「畜産と農家の兼業の方も多くて。そういった方に使ってもらっています」また別のエリアには竹の根がこんもりと積み上がっています。浦元さんの元へ年間2000トン以上の竹が集まるそう。「この竹もチップにします。竹害とか言ったりしますが、荒れ放題の竹林は、あそこまでなったら個人の力ではどうしようもない。だからああいう場所を綺麗に戻して、竹も活用してっていうのが理想ですよ」この竹チップを使って浦元さんが始

めたのが、とうもろこしの栽培です。土作りの際に竹チップを混ぜ込み、その土でとうもろこしを育てています。「この地域の特産品にとうもろこしがあるんですけど、小さい頃から身近なものだったので自分でもやってみたいなと。“エシカルコーン”と名づけて販売しています」産廃業者はありがたいと言われることが少ないと浦元さんは言います。「産廃を持ってきた人にコーンをあげると、ありがとうって言われるんですよ。めちゃくちゃ感動しましたね」今後は土を更に改良し、育てる作物を増やしていく予定。また、エシカルコーンを芯まで使用した加工品

や、竹を使った食品作りも検討しているそうです。「消費するのに何が良かって考えた時に、やっぱり食べることなんじゃないかって。実際にメンマ工場にも視察に行ったんですよ。やってみようかなと思って、エシカルメンマ。そしたらいつかラーメン屋さん開けるかな、なんてね」素材の良さを活かしつつ新しい価値を加えることをアップサイクルといいます。この方法で循環の一手を担う浦元さん。産業廃棄物処理という視点から素材の価値を見出し、循環させるためのアイデアと行動はとどまるところを知りません。







水を抜いてしまわないと 狂いが出し切らん

デクスウッド宮崎事業協同組合

かわぞえ けいさく
川添 恵作



「いやー機械の調子が悪くてずっと修理してましたよ。へとへとです」額の汗を拭いながら話すのは、川添恵作さん。宮崎県日向市にあるデクスウッド宮崎事業協同組合の工場長です。この協同組合は、通常はあまり使用されない木材を活用し、柱や板を製造・販売しています。本来建築材料となる木は、まっすぐで綺麗なものでないと使用できません。「でも、製材後の角材を切ることによって使える部分が出てくるんですよ。曲がったり欠点が一部あったとしても、それを切って取り除い

て柱や板にする。そういうことをやっています」柱や板になるまでに、長い月日と工程を要します。その工程の中で、特に重要なのが“乾燥”だと川添さんは言います。木の香りと機械音で満ちた工場内。進んでいくと、奥まったエリアに乾燥設備があります。デクスウッドでは天然乾燥に加え、低温乾燥と高温乾燥という方法で木材を乾燥させています。ボイラーの燃料には加工の際に出た屑や木の皮を使っています。「住宅用木材は乾燥機がない時代、

天然で乾かして含水率を落としていました。でも今は人工乾燥で強制的に熱を加えて中の水分を出すっていうやり方です」低温乾燥機を開けると、たっぷりの蒸気と濃縮された木の香りが広がります。まるで上質なサウナのように。この蒸気は木材から出た水分とのこと。木材から水分をしっかりと出すと、木材の曲がりや割れなど、狂いが出てきます。狂いが出たものはひと手間を加え再加工し、別の木材に活用します。「乾燥は、単に含水率を落とすことではなく、水分を落として木材が持つる癖を出すことだとうちは思っています」製材したての木、乾燥が終わった木、天然乾燥中の木。川添さんは一つひとつに手をあてて状態を確かめます。「これは表面の水分は落ちてますけど、中の方はまだですね。あっちは85%くらい。この辺は乾燥が終



デクスウッド宮崎事業協同組合

宮崎県日向市の事業協同組合です。木材から節や割れなど、建築用としては使えない部分を切り取り、それらを接合して作る集成材をメインに製造しています。木材は乾燥させることでより強度が安定し、歪みなども起きにくくなるため、建築用としての集成材の需要が高まっています。川添さんは工場長と実家の製材会社、有限会社 サンケイの取締役を兼任。細部にまでこだわった集成材を作っています。



わったばかりなので、11%くらいですね」大学を卒業後、デクスウッドに就職して20年以上経つという川添さん。実家は製材所を営んでおり、小さい頃から製材所が遊び場だったそう。「かくれんぼとかしてましたよ。自分の家なので絶対に見つからないんです。最高に楽しかったですね。まあ、めちゃくちゃ怒られてましたけど」中でもお気に入りの場所だったというのが製材所の隅にある建物の屋上。広大な製材所を一望できます。図らずもずっと木材と付き合ってきた川添さん。現在は商品作りにも興味があるそう。工場内に木工ができる工房を設置したいなど

思っているそうです。「これだけ木があるんで、物が作れたり体験できたりしたら面白いんじゃないかと。祖父と父も商品作ってたんで、自分でも作ってみたいという気持ちはありますね」工場での川添さんの仕事は“なんでも屋”だそう。朝は事務処理、昼間は現場仕事、機械の修理から打ち合わせの段取りまで。「自分は究極の二番手って感じですかね。家族だと、祖父と父が商品を考える、僕がそれを形にする、兄がそれを売って感じですよ。だから1人で何かするっていうのが面白くないんですよ。ああじゃないこうじゃないって言いながら擦り合わせていく方がいいですね」

スーパーサブとして今日も汗をかく川添さん。楽しみは飲み会だと言います。徹底的に飲む！とのこと。仕事関係の人達ともよく飲んでおり、つい話し込んでしまふとか。なぜそんなに木が好きなのかと尋ねると「好きだなんて勝手に決めつけないでくださいよ！」と笑って一蹴。「本来だったら燃やされてしまうとか、用途がないものを物として使ってもらうことが非常に大きな意味があるんじゃないかと思います。それを活かせることって何かかなと思って。昔の建築とか家具とかからヒントをもらえないかな。奈良とか石川とか、みんなで視察に行きませんか？」





山と神楽

宮崎県にある高千穂神社の夜神楽の様子です。高千穂神社に限らず、全国の神楽の多くには、山や五穀豊穡の神様を祭る舞があります。山の神は山を司るだけでなく、春には里に降りて来て田の神となり、林業のほか、農業、猟師、漁業にたずさわる人々からも信仰されています。



人と木は近い存在

株式会社鳥取CLT

井口 皓介



米子空港から(株)鳥取CLTのある南部町まで車で約40分。森林に囲まれたオフィス。隣接する工場の中は木の香りが満ちていました。ここで間伐材の丸太を加工・選別・接着してCLTが製造されています。CLTの材料となる板を選別する、巨大な機械のところに井口さんの姿がありました。「これは板に入っている節の数を自動的に判別して3つのグレードに分ける機械です。製造現場にいる時は、この機械の操作が一番好きかも(笑)。丸太はまん丸なモノからちょっといびつなモノまであって、

木の板も1枚ずつ別の顔をしているんです。そこが人に近いかなって感じてます。『人と木は近い存在』というか。この仕事で木材に対する感覚が磨かれている気がしますね」物腰穏やかにゆったりと話します。井口さんは現在40歳。入社して20年目を迎えました。出身地は南部町から約20km南東にある江府町。広大な原生林と水源に恵まれ、大手飲料メーカーがミネラルウォーターの工場を置くほどの自然豊かな地域です。「山や川が身近だったので、自然への特別な思いはなかったです。工業系の高校を卒業したあと金属加工の

会社に就職して、素材を均一に加工するっていう、今と真逆の仕事をしていました。鳥取CLTに入ったきっかけは、うちの兄が勤めていた原木市場とつながりがあり『社員募集をしている』と兄から聞いたことです。いざ入社してみると木のことを全然知らなくて、働きながら勉強したっていう感じです(笑)」取引先と向き合ううちに、木材の流通なら何でもこなすようになったと言います。「生産でわからないことは製造部に聞いて知識を増やしてます。お客さんから『この機械で何が作れます

か?』という質問があれば、機械の仕様を調べて『このサイズでこんな製品が作れますよ』って。すると今度は『こんな材料で作れますか?』と聞かれるので、じゃあ仕入れも…みたいな感じでいろいろやっています」近年、CLTは多様な業界から注目されているそうです。「国産の木材を使おうという国のリードがあり、設計事務所やデザイナーからオファーがあります。用途は様々で住宅やオフィスの建材、最近ではCLTをキャンパスにして画家の方に絵を描いてもらったこともあります。新しい分野への挑戦が楽しいですね。いっぽうで、用途と気候に合わせた品質管理がもっと必要であることもわかってきまし

た。木は伐られても呼吸していて、乾燥する場所に置くと縮んで割れることがあります。特に鉄筋コンクリートのオフィスなどは極度に乾燥するので、割れやすくなるんです」そんな井口さんが山との関わりに気づく出来事があったそうです。「地元にあるミネラルウォーターの工場へ、初めて家族と見学に行きました。その際、林業が水づくりに貢献しているという話を聞かせてもらったんです。木はある程度育つと“間伐”という間引きを行います。これによってCLTにも使われる間伐材ができます。木も健全に育ち、良い土壌と地下水をつくります。仕事で使っている間伐材が自然環境に作用していると知ったことで、これが

らも山とのつながりを意識して働きたいなと思いましたね」井口さんは6歳の男の子のお父さんでもあり、最近はお子さんがCLTを見ると「これはお父さんが作ったの?」と尋ねるようになったそうです。自宅のダイニングテーブルもCLTで自作しているとのこと。家ではどう過ごしているのでしょうか?「見た目と違って意外だと言われるんですが、ヘヴィメタルを聴きながら過ごしてます」と穏やかな印象からは想像できないような一面も。鳥取CLTの営業として20年間取引先に寄り添ってきた井口さん。木もまた、井口さんの人生に寄り添う存在となっているのかもしれません。

株式会社鳥取CLT

自社工場で国産の間伐材(間引きのために伐採した木材)などから作った板を重ねたパネル「Cross-Laminated Timber(以下、CLT)」を製造し、おもに建築素材として販売しています。営業部に所属する井口さんは、商談はもちろん生産管理・仕入れ・広報まで幅広い業務をこなします。





世界を救う スーパーヒーローになりたい

トキワランバテック株式会社

さかい こうじ
酒井 晃二



鳥取県南部町の複合施設「キナルなんぶ」。図書館などを備えた施設の内装には、鳥取CLTが製造した県産のCLTがふんだんに使われています。そのロビーで、壁や本棚にふれながら視察するトキワランバテック(株)の酒井さんは、営業部に所属する44歳。プライベートでは2人の子どものお父さんでもあります。「家族旅行の途中でお土産店に入った時、棚や台が木製だといふ観察しちやいます」と話す酒井さんの隣で「業界あるあるですね」とうなずくのは鳥取CLTの井口さん。おふたりは“ツーカーの仲”なのです。「僕の20代って結構はちゃめちゃで(笑)。大学生だった僕は中国へ留学しました。香港が中国に返還されて

『中国が熱い!』と注目が集まっていた時期で、これから成長するぞって空気を肌で感じてたくて。それがきっかけで海外旅行にハマって27歳までニュージーランドや東南アジア各国を飛び回ってました。その時、日本にない貧困の場面をすごくたくさん見たんですよ。『お金をくれ』ってしがみついてくる子どもたちがあまりにも衝撃的で…その、恥ずかしいんですけどこのことがきっかけで、持っている夢というのが『世界の困っている人を救う、スーパーヒーローになりたい』です。27歳が見るような夢じゃないですけど(笑)。でも自分一人のできるこって本当になくて。その時、幼稚園から付き合いのある友人に相談してみたら『世界を救うはいいいけ

ど、その最小単位は“家族”なんじゃない?』と言われたんです。じゃあ、まずは自分にできることをして家族を守ろうと、30歳の時に働き始めたのが今の会社です」入社後は「とにかくやってみよう」とライトバンいっぱい資材を積み込んで走り回ることもあった酒井さん。やがて「アサガオプロジェクト」を立ち上げます。この事業は、余剰木材で作った植木鉢でアサガオを育てることで、人と山の関わりを考える「木育」に繋がるというもの。「会社で立ち上げたんじゃない、僕が個人的にやり始めたんです。たまたま取引先との雑談で『学校の理科で使ったプラスチックの植木鉢って捨て方がよくわからないし、どうしてる?』

みたいなやりとりがきっかけで、製材工場から端材をもらってきて植木鉢を試作しました。子どもが一人で組み立てられるように試行錯誤しましたね。完成したらすぐ『使ってみてもらえませんか?』と、いろんな小学校に営業電話をテレアポのように掛けまわりました。すると1件だけ、全校生徒20人ほどの小学校が『じゃあ使ってみましょう』と言ってくれたんです」こうして取り組みが広がる中で「アサガオプロジェクト」の意義も高まっていきました。「植木鉢はやがて壊れます。壊れ方には特徴があって、鉢の内側が土の湿気で膨張して、外側は日光で乾燥して縮むことで反っていくんです。反ったところがメキメキメキって割れてポキッと折れる。1年目は壊れなくても、2年目はダメでした。でも、この植木鉢を使うこと自体が、壊れ

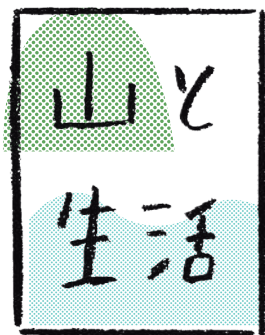
るまでを含めて経験や勉強になるんですよ。理科であり、図工であり、社会科でもあり。『そういうのを詰め込んでやりませんか?』って他の小学校にもプレゼンしました」地元愛知県の木材関連会社や自治体ともつながりが生まれたそうです。現在このプロジェクトは酒井さんの手から派生して、岐阜県飛騨市では地産広葉樹の端材が使われるなど、地産材を利用した教材として定着しつつあります。入社14年、エネルギッシュなものづくりと向き合う酒井さん。その姿は夢見たスーパーヒーローへと近づいているようです。「家族や子どもが成長してほしいから、環境のことも考えたりする。行動に移したことがどこか遠くの誰かを助けているかもしれないと思うと、全部繋がっているな、と感じてます」





山の神様へ

間伐の現場の入り口に、お神酒が置いてありました。山に入る人々の、自然の恵みに対して感謝をする気持ちは昔も今も変わらず息づいています。



毎日のお風呂と、 山のつながり

ひらまつ ゆうすけ
文・平松 佑介
(小杉湯3代目当主)

小杉湯

昭和8年に創業し、国登録有形文化財に指定された老舗銭湯。空き家アパートを活用した「銭湯ぐらし」、オンラインサロン「銭湯再興プロジェクト」など、銭湯を基点にした繋がり、また様々な企業や団体とコラボレーションした独自の企画を生み出している。2020年3月に複合施設『小杉湯となり』、2024年春には初の2号店目となる『小杉湯原宿（仮称）』を開業予定。

僕は、高円寺にある小杉湯という銭湯に生まれ、6年前に3代目として小杉湯を継ぎました。小杉湯は、名物のミルク風呂、日替わり風呂、ジェット風呂という温かい3つの浴槽と、掛け流しの水風呂が1つ、流行りのサウナは無い、街の小さな銭湯です。高円寺周辺に暮らしている方を中心に、平日400～500人、休日は多い日で1000人ものお客様にお越しいただいています。こんなに多くのお客様に来ていただける理由の一つが、お風呂の水質だと思っています。地下90mから汲み上げた地下水はやわらかく、「小杉湯のお風呂は、やさしくて、あたたかい」「小杉湯の水風呂は気持ちがいい」と評価をいただき、熱湯と水風呂を交互に楽しむ「温冷交互浴の聖地」と呼ばれるようになりました。小杉湯の変わらぬモットーは、「きれいで、清潔で、気持ちのいい、お風呂を沸かす」こと。そして、お客様に気持ちがいいと思ってもらえるお風呂を作るには、地下水は必要不可欠です。



昨年、とあるご縁で、東京の檜原村にある林業の会社を訪問する機会がありました。それまで、“林業”という業界にも言葉にも全く接点はありませんでしたが、1日かけて山を巡り、林業の向き合う課題を聞いたところ、驚くほど林業と銭湯業界が似ていることを知りました。自分達の努力が、自分達の世代には返ってこないけれど、100年後にいい山が作られていることを信じて、今日も山に向き合う。僕が小杉湯を継いで6年。90年続いた小杉湯を、100年後も続けていくために、銭湯の未来に向き合っていることと同じだと思いました。次の世代につなげていくために、今の銭湯に向き合う。今の山に向き合う。遠かったはずの林業は、僕が日々向き合っている小杉湯と非常に近く、驚くほど親近感がある業界でした。

そして何より、小杉湯自慢の地下水は、誰かがいい山に向き合ってくれているから享受できているものなんだと気づいたんです。いい木が育つから、いい森が生まれる。いい森があるから、いい山になる。いい山からいい水が流れる。いい水が銭湯に辿り着き、お湯となる。いいお湯が誰かの今日を幸せにしている。いい木のおかげで、いい毎日が生まれている。いい木のおかげで、

気持ちのいいお風呂を沸かせているんだと気づいた時、これまで縁遠かった山の存在が自分ごとに感じられ、山に向き合う皆さんに心から感謝の思いが湧き上がりました。

僕が6年間、小杉湯を経営して気づいたことがあります。それは、世界はやさしくつながっていること。90年続いている小杉湯には、僕の祖父が経営していた時からのお客様が今も来てくれています。父親が経営していた時のお客様が、今は小杉湯の社員として働いてくれていたり、何年も前に出会った方と、ちょっとしたことがきっかけで新たなお仕事が生まれたりしています。短い時間軸の中ではつながらないことも、100年という長い時間軸の中では、いつかどこかで、やさしくつながっていきます。銭湯と林業も、毎日のお風呂と山も同じ。世界はやさしくつながっている。そんな世界を伝えたくて、おがくずをご提供いただき、檜の匂いが香る木のお風呂を実施することにしました。そのキャッチコピーは「いつも、いい木のおかげさまで。」

今日の小杉湯も、きっと皆さんが今日入るお風呂も、いい木のおかげさまで、いいお湯が沸いています。

職人が作る、食を支える炭



竹見野の樹

宮崎県美郷町は日向備長炭の産地です。日向備長炭は紀州・土佐と並ぶ日本三大備長炭の一つで、他の備長炭がウバメガシを使用するのに対し、日向備長炭はアラカシを使って炭にします。美郷町で製炭業を営む日高順二さんは家業を継いだ5代目です。自分たちで育てた植物に囲まれた美しい環境で、製炭以外にも原木椎茸の栽培や有精卵の生産なども行っています。伝統的な製法で備長炭を作るには、気が遠くなるほどの時間と工程を要します。日高さんは自分の山から切ってきたアラカシを、乾かないうちに窯へ並べ入れます。窯の下には小窯と呼ばれる焚き口があり、そこに薪を焚べます。ここからは乾燥作業。窯の入り口を粘土で密閉し、1ヶ月程かけて木を乾かします。次は実際に木を燃やし炭化

させる工程。木が燃え切ってしまうよう酸素を調整するための小さな穴をあけ、1週間ほど燃やし続けます。中の状態は煙の量や匂いなどにより判断。経験と勘が重要になってきます。窯の入り口を徐々に開けると、窯内に酸素が入り込み、一気に炎が上がります。焼き切ることで、より純粋な炭に仕上がるそうです。1000度を超えた窯から取り出した炭に灰をかけて一気に消火。出来上がった日向備長炭の断面には、年輪と放射状の美しい木目が現れます。木や窯の持つ個性を活かしながら、長い月日をかけて作る日向備長炭。アラカシは切った部分から新たに萌芽する木ですが、植樹も行われているそう。日向備長炭を受け継いでいくためにも山木全てを守っていかなければと日高さんは言います。



株式会社グリーンノーム

2020年より大手通販サイトで全国で販売を開始。その知名度は国内だけにとどまりません。宮崎県美郷町から海外9カ国に向けて日向備長炭を届けるのが、(株)グリーンノームです。代表の下川陽一郎さんは元々は福岡市でバーを営んでいました。バーでは燻製料理を提供しつつより本格的な燻製を作るには炭火ではないかと考え、地域おこし協力隊として宮崎県に移住し、製炭業に携わっていく中で、日向備長炭の可能性を感じつつ、製炭者がどのような想いで炭を製炭し地域活性を考えているのか、消費者に発信できていないのではと感じたそう。下川さんは伝統的産地で経験や勘が重視される中、様々な部分で数値・データ化を図り、高

品質な炭を安定的に製炭かつ新規参入者でもわかりやすい方法を日々研究していると言います。木を窯に入れ乾燥させる工程は、伝統的な方法だと1~1.5カ月ほどかかります。下川さんは他産地の窯や製炭方法を比較し、自社の手法を改良。乾燥時間を最大半分程度にまで縮めることができたそう。使用する薪の量も減らす結果に。日向備長炭の原料となるアラカシについても、炭木として使えるまでに約30年の年月がかかることから木も山も大切に使い続けなければと言う下川さん。現在、備長炭の機能性に着目し、炭石けんやデトックス食品としてより多くの方々に使って頂けるよう商品開発を行っているそう。高品質かつ使い勝手のいい日向備長炭を世界に届けています。



山となりわい7



木の価値と可能性、そして人 結局、惚れたって感じですね

株式会社グロースリング 百年木材事業部
はやし さゆみ
林 紗由美



美しい木目と佇まい、ずっと馴染む心地よい手触り。樹齢百年以上の国産材のみを使用したプロダクトブランド「百年木材」の商品です。宮崎県日向市で製材業を営む(株)グロースリングの中でスタートした「百年木材」。この商品の開発から営業まで行うのが、プロジェクトマネージャーの林紗由美さんです。グロースリングは林さんのおじさんが始めた会社で、現在は林さんのお父さんが代表を務めています。「工場内はもちろんですが、父や祖父の軽トラが木屑だらけで。車のあちこちに丸太の入札の札が入ってるし、入札会について行ったこともあります。小さい頃から、何か面白い世界やなっていうのと、誇らしいっていうのは漠然と思ってましたね」木材に囲まれて育った林さん。大学

進学を機に宮崎の実家を離れます。そこからグロースリングに入社するまでは、オーストラリア留学や商社で日用雑貨の営業職、ダンス講師をしたりなど、異色の経歴の持ち主です。「オーストラリアでは当たり前のことなんですけど、たくさんの移民がいて様々な問題に関して熱心に活動しているんです。カルチャーショックですよ。自分はほんの一部分しか見れていなかったんやって、すごく刺激を受けましたね」オーストラリアで多国籍多文化に触れ、就職後は商品の売り場作りや、並行してダンスイベントのプロデュースなどを経験。たくさんの人たちと一緒に何かを作り上げていく環境に恵まれていたそうです。当時大阪でダンス講師を務め、パフォーマンスをしに海外へ行くことも多

かった林さんに、突然の転機が。「両親は私がダンスすることにずっと反対してたんですけど、突然父から頼まれたんですよ。フラッシュモブしてくれと。俺が踊るからと」この日はお父さんが務めていた協会の会長を引退し、次期会長へと引き継ぐ大切な日だったそう。林さんはお父さんやダンスの生徒さんたちと一緒にフラッシュモブを成功させます。その姿が「百年木材」構想のアドバイザーでもあった銘木会社の社長の目に留まります。「これからはモノだけじゃ売れん。人を巻き込んでいかなければと。会社は娘さんにやらせなさいって社長が父に言ってくださって」突然のことで林さんも驚いたそうです。会社も林さん自身もこれからどうしていこうかと考えていたタイミン

株式会社グロースリング

宮崎県日向市にある製材会社です。長く木と関わってきた中で新たに始めたのが、木の樹齢や木目に注目した事業「百年木材」。樹齢百年を越える木を使用し、木目にこだわった希少な板を使用した商品などを生み出しています。林さんは国内外問わずイベントやワークショップに参加し、精力的に活動しています。



グだったそうで、とても悩んだと言います。しかしお父さんが構想していた「百年木材」が形になり、家具が並んだ展示会を見て感動したそう。「木で、宮崎の木材でこんなことができるんや！うわ、やられたって思いましたね。それから祖父の告別式で再度宮崎に帰った時、会社の雰囲気すごく良くて。とにかく人の良さがポンと刺さって。これが祖父の遺産、積み上げてきたものな

んだと思うと、すごく考えさせられて、父にやってみないって話したんです。それから今に至ります」事業や会社について話す林さんの口からは「〇〇さんのおかげで」「××していただいて」という言葉が繰り返されます。これから、オーストラリアでのワークショップを控えているそう。「たまたまご縁をいただいたので、行ってきます。環境への配慮に意識

の高いオーストラリアで、私たちの思いは伝わるのかなと。単に良い木材を売りますじゃなくって、未来に対しての百年っていう思いだったり、そういうのは私達が売らないといけないんだろなっていう考え方に行き着いてきています」先代から続く想いと、そこに関わる人々、木の価値と可能性。林さんはそれらを背負い、まっすぐな姿勢で軽やかに全国を飛び回っています。



お酒に染み出す山の味 1

有明産業株式会社



日本で唯一の独立系洋樽製造会社、有明産業(株)。その工場が宮崎県にあります。ウイスキーやワインの出来を左右するのは、樽の力であるとも言われます。樽を作る木材は水漏れしないよう、硬くて重いナラ属性の木を使います。有明産業では北アメリカ産のホワイトオークをメインに使用。そして国産のミズナラを使用した樽作りも行っています。ミズナラで作った樽は甘味がより引き立った味わいになるそう。この樽を使用したウイスキーが海外でも評価され「国産材のポテンシャルの高さを感じている」と製造部長の小田原孝吉さんは言います。樽の製造は一切の誤差が許されない職人技。希少な部位の板を隙間なく並べて樽の形に組み立てます。接着剤は一切使用せず、ガマという水を通しにくい植物を木の隙間に入れ込みます。木の成分抽出を促すために樽の内側を焼く作業は、炎の音や色にまで気を配ります。水漏れがないかをテストし、クリアしたものだけがお客様の元へ。日本のミズナラはホワイトオークに比べ、道管の構造や成分の関係

から水が漏れやすい木なのだそうです。水漏れがあった樽は解体し、板を交換して再び組み直します。また、ミズナラ自体も入手が困難で、さらにそこから樽に使用できるものを厳選するという、非常に手間暇のかかるものです。しかし、全ての労力を惜しまないと小田原さんは言います。「美味しいお酒を作るため、木の力を借りてお客様の要望に応えていきたいんです」





山と食

お酒に染み出す山の味 2

おすずやま
尾鈴山蒸留所



宮崎県児湯郡、尾鈴山。山の奥深く、静かに佇む尾鈴山蒸留所。ここでは焼酎やウイスキー、ジンなどの蒸留酒が作られています。蒸留酒の香り、口あたり、味わい、余韻。これらを仕立てるのは、麴の力と人の技。さらに、厳選した素材、それらを育む豊かな大地と上質な水のおかげ。ここじゃないとできなかった、と代表の黒木信作さんは言います。尾鈴山蒸留所では、醸すための環境や道具にも、全てこだわりと理由があります。酒造りの肝となる麴、その原料となる米や麦を蒸すのは、宮崎の杉でできた特製の「甑（こしき）」という蒸し器です。また、麴を作るための特別な部屋「麴室（こ

うじむろ）」は部屋全体が木で覆われています。アルコール発酵を促すための木桶も宮崎の杉から作られたものだそう。ウイスキーを熟成させるセラーには、大小様々な大きさの樽が並び、中には宮崎県産の栗・桜・杉で作られたものもあります。耐久性や効率性からステンレス製のものを使用することが主流の中あえて木製である理由は、木が蒸気を程良く調整し、温度も安定しやすいから。また木が持つ菌や成分により、まろやかで深みのある複雑味と香りが出るそう。加えて、「宮崎の山は杉が豊かですから」と言う黒木さん。山の恩恵を素直に真摯に醸す蒸留所が、尾鈴山にありました。





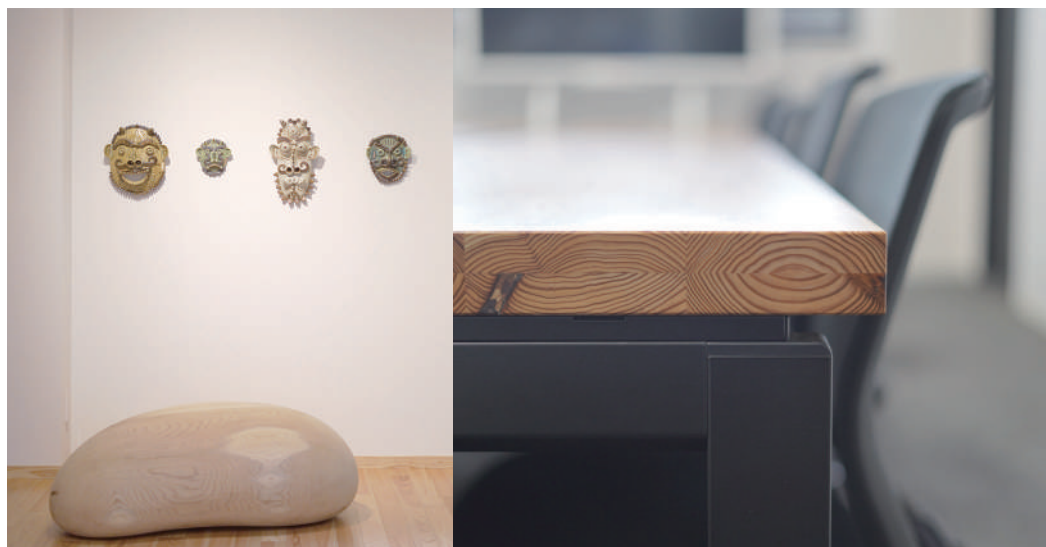
海の恵みは山の恵み
木が元気に育つ山に降る雨が、木の根が抱えた土を通り、たくさんのミネラルを含みます。その雨は、川を流れ、海に辿り着き、豊富な海の幸を育てています。



木に囲まると 暮らすように働けますね

鬼塚電気工事株式会社

おの ふみとし
尾野 文俊



エントランスをくぐると、木の香りと共に杉でできたカウンターとキューブ。さらに進むと、杉の丸いオブジェとそれを見守るように並んだ鬼面が現れます。「どちらも大分のアーティストの作品です。スギコダマは大分県産日田杉を削り出して作っています。重厚なのに柔らかな印象ですよね。鬼面は鬼と仏は同等という概念をもつ地域の作家の作品。訪れる方に福が来るように想いを込めて展示しています」説明してくれるのは尾野文俊さん。大分県大分市にある鬼塚電気工事(株)の6代目社長です。この土地で生まれ、サッカーとジャズに親しみながら学生時代を過ごしたそう。東京の電機メーカーへの就職を機に大分を離れましたが、家業である今の会社で働くために戻ってきました。旧社屋が築50年以上経過し老朽化したため、働く社員や環境のことを考え建て替えることを決めたそうで

す。新社屋は『ZEB』という建物です。『ZEB』とは Net Zero Energy Building (ネット・ゼロ・エネルギー・ビル) の略で、再生可能エネルギーなどを利用し、エネルギー消費量を限りなくゼロにする建物のこと。センサーや各種機器から社屋の情報を集め、BEMS (ビル・エネルギー管理システム) で管理しているそうです。2階のオフィスは、ワンルームで開放的な空間になっています。フローリングは全て国産杉、デスクの天板は杉の集成材を使っています。「デスクは大分県産杉です。どこの山から切り出されたかトレーサビリティを確保していて、その山は3年以内に植林される予定です。次の世代に繋ぐため、見届けたいです」社内の技術者はモニターを2画面使いながら図面を広げたりするので、デスクは一般的なものよりも広く使うことができ、人数が増えても柔軟

に対応できるよう、この仕様のデスクを選んだそうです。「人が増え、旧社屋ではワンフロアに収まらなくなりました。結果、コミュニケーションがとりにくい環境になってしまった。今は皆の様子が見えるし、交流しやすくなりました。働きやすい空間になったと思います。私のデスクもちろんここにありますよ」尾野さんのデスクには、手のひらサイズのスギコダマがあります。「疲れた時にはこの小さなスギコダマを触ります。木の香りと滑らかな木肌に癒されるんですよ。身の回りのものは、使い心地が良いのはもちろん、長く使えて環境にも優しいものを選んでます」また、フロアの至るところに植物があり、どこに座っても見えるように配置されています。「植物の世話は社員がしています。近くの植物に水をやって、眺めて。誰が世話したかによって、成長の良い

子と悪い子がでてきて面白いです」新社屋建設を考えた当時、『ZEB』を取り入れた建物は少なく、まだ馴染みがなかったそうです。「新社屋建設にあたって大切にしたのは、第一に働きやすさ。それから、社会課題である脱炭素です。ZEBの説明や設備を見るだけでは伝わりにくい脱炭素化への取り組みは、地域産の木材を多用したオフィスを通じて感覚的にも伝わっているようです。大切なのは共感。共感できるからこそ共に取り組む仲間ができていくと思うんです」新社屋になってからは、木質化したオフィスを見たいと来客が格段に増えたそうです。木や植物に加え、社内ではたくさんのアート作品が目に入ります。鬼塚電気工事は、大分県で活動するアーティストの支援を行っています。また、クリエイターと共にプロジェクトONICOを始動。無料の充電ステーションの設置や、防災に

も意識を向け、停電時の電源供給対策にも取り組んでいます。「こういった取り組みを進める中で、社員のアイデアやスキルを活かす機会が増えたと思います。社員のクリエイティビティを高めるという点でも、やはり働く環境は大切だと思います」この社屋の最上階には、大広間と屋上庭園があります。「ここは社員がお昼ごはんを食べたり休憩したり、自由に使っています。庭園には大分由来の在来種の植物をたくさん植えているので、数年後にはもっと緑に囲まれているんじゃないかな。社員にも気持ち良く過ごしてもらえると良いですね」屋上庭園からもう1段高いところに展望デッキがあり、手すりにはドリンクホルダーになる穴があいています。「ここで夕日眺めながらビール飲みたいねって話したら、現場監督と設計者があつらえてくれたんですよ。

鬼塚電気工事株式会社

大分県大分市の電気工事会社です。電気工事や管工事を行っています。自社ビルを『ZEB』で建て替えたことをきっかけに、ZEBプランナーとしてZEB化事業にも取り組んでいます。津波避難ビルとしての役割も持ち、最上階は災害時には自動で開錠し、大人数でも収容可能な空間設計になっています。また、社会の課題解決として、アートやクリエイティブと連携した活動を行うプロジェクトONICOを進め、災害時の電源供給対策にも取り組んでいます。



関わってくださった方の高い技術と遊び心が詰まった社屋なんです」ここからは大分川、その先の由布岳など遠くまで見通せます。尾野さんは以前、旧社屋が入ったビルの最上階に住んでいたことがあるそう。「絶景なんですよ、ここからの眺めは。何物にも変えがたく、絶対に残したいと思ったんです。これが僕の裏ミッションです」そう言って山を見つめる尾野さん。鬼塚電気工事には、働く人を想う木とアートに囲まれた心地良い空間が広がっていました。





皆様は、暮らしの中で、何か大切にしていることはありますか？

「食べることが大切だ」という方は、食材の旬や産地、料理人にまでこだわりの
「寝ることが大切だ」という方は、自分に合った寝具探しや
睡眠環境づくりを追求したり、
「働くことが大切だ」という方は、最新の仕事効率アプリを探したり、
体に合った家具、休憩時の癒しグッズにまでこだわりの
という方もいるかもしれません。

このように、一人ひとりが、自分の大切なことを考えながら
日々暮らしている世の中で、最近では「循環型社会を目指そう！」
「脱炭素だ！」と耳にするようになりました。

ただ、こういった言葉は、豆粒では大切だ”とわかっていても、
自分の暮らしに直接関係してこない、正直何をしたらいいかわからないし、
未来を考えることが、本当に大切なのか、
語れることさえ億劫に思う方が多いのを実感した”と思います。

ですが、自分が大切にしていることがあるように、
山や木、この先の未来を大切にしている方達がいる、
その存在が、豊富な水や食材、快適な住居、愛着のある家具など
「自分の大切」に繋がっているんだと気づくことができれば、
少しだけ、山や木、この先の未来のことを
自分ごとで感じることができるようになります。

様々な人の暮らしが営まれている社会には、
「自分の大切」以外にも、「誰かのため」も多様に存在し、
その全てが、ゆるく繋がりを持っています。
だとすると、もしかしたら「自分の大切」が、山を大切にしている方達の
暮らしを支えられることだって、あるのかもしれない。

山から見れば”みんな同じ”。
大切なのは、お互い同じ目線で繋がりを意識すること。
「山がいきる」では、「生産者と消費者」という分け方をしていません。
生産者も消費者も、「山となりおいをする生活者」として捉え、
その人の生き様や、人となりから「ああ、みんな同じ生活者なんだなあ」と
共感してもらうことで、山や木、この先の未来の暮らしを
「大切にしたい」と思えるきっかけになれば幸いです。

山がいきる 編集担当



●表紙の写真

湿った空気が雲に変わり、今にも恵みの雨になろうとしている瞬間です。この写真の中には、棚田や畑、ツンツンした人工の針葉樹林、モコモコした天然の広葉樹林と一緒に写っています。そして針葉樹林は皆伐後、再造林して間もない場所もあれば、今なお立派に育っている場所もあり、多様な表情を見せてくれています。

取材協力

樹 / ヤマサンTree Farm/ 株式会社コーポレーション・クリエイト / デクスウッド宮崎事業協同組合 / 有限会社 サンケイ / 株式会社鳥取CLT/ トキワランパテック株式会社 / 株式会社グロースリング / 鬼塚電気工事株式会社 / 美郷町役場 / 渡川マンマ / 竹見野の樹 / 株式会社グリーンノーム / 有明産業株式会社 / 株式会社尾鈴山蒸留所 / 高田屋 / 高千穂神社 / 株式会社日添 / 五木村森林組合 / 園田農林株式会社 / 諸塚村観光協会 / 森林建築研究所（敬称略）

イラストレーション = unpis

文 = 齊藤千絵 (P.6~7,12~17,20~21,34~41,44~45)

野鶴美和 (P.26~29)

寄稿 = 平松佑介 (P.32~33)

撮影 = 新井亨

写真提供 = 樹 (P.10~11) トキワランパテック株式会社 (P.28~29)

株式会社小杉湯 (P.32~33) 鬼塚電気工事株式会社 (P.45)

全体監修 = 江口宏志

山がいきる

発行日

2023年9月8日

発行元

株式会社良品計画 / 株式会社内田洋行

©Ryohin Keikaku Co.,Ltd.,UCHIDA YOKO CO., LTD.,unpis(illustration)

Printed in JAPAN



